

家庭科の男女共修をすすめる会 会報 '90 春

連絡先
東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内 T151
振替 東京九一八九二
発行 一九九〇年三月一七日

一九九〇年度総会のお知らせ

とき 四月七日(土) 午後一時半～四時半
ところ 婦選会館(〇三・三七〇・〇二三八)

Ⅱ 話し合い

Ⅰ 議事

- 1 一九八九年度総括
- 2 一九九〇年度運動方針
- 3 一九八九年度決算
- 4 一九九〇年度予算
- 5 一九九〇年度世話人

共修をすすめる会の集会は昨年四月一日以来です。久しぶりに大いに語り合います。中学・高校の指導書も揃い、いよいよ移行期間に入ります。皆さんの地域の動きはいかがでしょうか。社会の大きな動きの中で共修運動をすすめて行くために、どんなことを考えるべきでしょうか。

男子校アンケート結果訂正

前号報告のあと、5校(公立2、私立3)

から回答がありました。前号1ページの数字

のミスの訂正も含めて、回答校は下のように

◆回答校総数二三四(四三・一%)

◆内訳(訂正部分のみ)

●公立 普通科16→18 普・商他1→3

追加 普他1と学科別不明1 計142→144

もくじ

一九九〇年度総会のお知らせ	(1)
男子校アンケート結果訂正	(1)
女性国会議員アンケート結果	(2)
男子校アンケート追加分	(5)
兵庫県でも中学にアンケート	(5)
男子校アンケート・マスコミでは	(6)
おはようジャーナルでは	(7)
国会・都議会から	(8)
入学定員差別をなくそう(静岡から)	(10)
都立高男女定員差別や改善	(10)
「男女共に学ぶ家庭科を早期に実施したい」と文部省	(11)
移行措置に対して私たちは	(12)
文部省への要望書	(13)
連絡会報告	(14)
世話人会報告	(15)
おしらせとおねがい	(16)
事務局担当者から	(16)

●私立 普通科49→52 計87→90

中学から続いている学校24→25

追加分の回答内容については5ページをごらん下さい。

女性国會議員

アンケート結果

―家庭科男女共修は
男女平等教育の第一歩―

芦谷 薫

昨年九月、参院選挙後の全女性国會議員との懇談会が52団体「連絡会」主催で開かれた各議員は、男女平等社会をつくるために具体的に組みたいテーマを熱く語られた。そこで会では、全女性国會議員に家庭科の男女共修実施にむけて御意見や施策をお尋ねしたいと、アンケート調査を十一月に実施した。

国会情勢のあわただしい動きや年末年始をひかえた時期であったためか、冬号にも報告されたように、予想外に回答が少なかった。そこで年末に、一部の議員には電話で問い合わせてみたが、地元に戻られたりの不在が多く、年明け早々に未回答の議員には再度アンケート用紙を送りした。

その結果、対象40名(衆院7名 参院33名)中、20名(衆院5名 参院14名 無記名1名)

の回答が得られた。回収率は50%である。議員対象としては低目。故市川房枝氏が早くから取り組んでこられたこの問題への関心が薄いとは思えない。超多忙な故か? しかし帰ってきた回答の多くは、記述形式が多いにもかかわらずいていねいに答えられていた。

質問文と回答のまとめ

★「この種のアンケートはすべてお断りしています」という一通を除く19の回答からで、記述部分は、抜粋分類してまとめた。

問1 今回の教育課程では、すべての小学校・中学校・高等学校で家庭科を男女ともに必修することがきめられました。これについてあなたはどのように思いますか。

1 賛成	19
2 反対	0
3 どちらともいえない	0

●その理由について

●「一九八五年、いわゆる『女子差別撤廃条約』を批准する際には、指導要領の改

同によってこそ正しくすすめられる。男は仕事、女は家庭という意識がまだまだ根強いことを考えると教育の場で民主的家庭生活

断力を身につけることが必要」(小笠原貞子)と男女が共に生きるための基礎を学ぶ教科だからという回答8

●「一人の社会人として自立して生活していくための基本」(岩佐恵美)「男子も生活を自立して行っていくため」(吉川春子)

と考えます。男女の対等で豊かな関係を家庭職場として政治の場でも確立する必要があると思います。そのためには家事労働その他あらゆる社会生活を男女で共有すべきだと考えます。従って男子生徒にも女子生徒と同じく家事労働が出来るよう教育すべき」(堂本暁子)と、生活的自立をすべての男女にという回答5

●「男女平等意識の促進において有効」(肥田美代子)という趣旨の回答3

●「家庭科男女共修は実現をめざして長い闘いがありました。一歩前進ということとで感慨もひとしおです」(竹村泰子)「女性達の意識の高まりからすると今回の措置は当然というより、むしろ遅すぎた感すらします。とはいえ『国連婦人の十年』を盛りあ

げた運動の大きな成果のひとつ」(石井郁子) 運動の成果との指摘2

●「(当然であるが)しかし、今回の改訂は一人一人が自立して生きていく力を育てる上で不充分であり、またそうした点を学校教育のみに押しつけるものとなっており教育内容については議論の必要がある」(篠崎年子)との指摘が4

問2 「女子差別撤廃条約」の条文の中で、家庭科の男女共修と特に関係の深いのはどの項目とお考えですか。

●19名すべてが第十条「教育における差別撤廃」を、そのうち(b)項「同一の教育課程」(c)項「すべての段階であらゆる性役割についての定型化された概念の撤廃」まで示されたのは7名、加えて(h)項「家族計画を含む健康福祉の教育の機会」を示されたのは5名

●6名が第五条「適当な措置」を、そのうち(b)項「家庭教育における男女の共同責任」まで示されたのは5名

●第二条「差別撤廃の政策」(d)項「差別行為、慣習」、前文「完全な男女平等の達成は性役割の変更」を各1名ずつが示された。

訂を条件にしたので当然のことだと思ふ。

又真の男女平等を実現させる為には、教育の場における平等教育が最も大切であり、その第一歩が家庭科共修だと思ふ(刈田貞子)「ILO一五六号条約や一六五号勧告で、差別撤廃条約で、男女が平等に家庭責任を負い、職場と家庭の両立が可能となる措置をとるよう提唱しているように、男女が同一のカリキュラムで共修することは、定型化された概念や差別の撤廃と平等実現の点から重要な意義がある」(高崎裕子)のように差別撤廃条約に触れての回答6

●「憲法26条には、すべての国民はひとしく教育を受ける権利を持つとあり、このことからいっても男女が差別なく同じ教育を受けるのは当然」(竹村泰子)「憲法、教育基本法にせよ、男女同一の教育課程であることが当然」(粕谷照美)と国内法に照らしても当然であるとの回答4

●「家庭科は衣・食・住のみならず、家族のあり方や子どもを産み育て、共に生きるための基礎的、基本的内容を学ぶ科目であり、民主的合理的家庭生活を営むために男女が共に履修することは当然」(高崎裕子)「婦人差別撤廃条約をもち出すまでもなく、家庭そして子どもの養育に当っては男女共

問3

a 中学校、高等学校において家庭科の男女共修をすすめるためにはどんな施策が必要ですか。該当する項目に○をつけてください。

- 1 施設設備を拡充する 16
- 2 教師の増員(家庭科担当教師) 18
- 3 すべての学校に専任の家庭科教師を配置すること 14
- 4 実習授業においては半数学級にすること 15
- 5 男女共修について全教師の研修を行うこと 10
- 6 校長・教務主任に男女共修に必要な資料を配布すること 11

b 先生ご自身はこのことについてどのような活動をしてくださいますか。

- 国会、委員会や質問や発言 12
- 文部省への申し入れや質問趣意書で質す 10
- 国会内外で広く啓発活動する 4
- 家庭科教師との懇談・実態調査視察など 3

- 委員会で質問した 3
- 党の政策作りへ参加 1
- 議員をやめるが、今後は地域で男女平等の重要な課題として運動していく 1

問4 a さらに広い視野から男女平等をすすめるために行政施策として優先すべき事柄を三つあげて下さい。

【雇用・労働における男女の平等 17】

育休法、看護休暇、パート法などの法制度を整え、保育所拡充などの条件整備8採用、昇進、研修などの雇用における平等確保、企業への行政指導強化6労働時間短縮2労働環境整備と職場拡大2賃金格差の解消1母性保護推進1国家公務員の採用、昇格（給）の男女平等1

【あらゆる分野への女性進出 9】

審議会や行政機関へ積極的に女性の参入をはかる4行政、民間共に企画・運営・経営すべてのステージで女性の意見を、そのためにアフターマティプアクションを2国、地方自治体議会に女性の政治家を送り出す行政施策を1

【男女平等、人権尊重の教育重視 7】

教育の場における徹底した民主教育を4学校や社会における男女平等、人権尊重の教育重視1就学における男女差別をなくす1家庭や学校で家事労働や子育てを協力して行うよう教育1教職員の増員

【男女平等にかかわる法制度の見直し 5】

【高齢化社会にむけての施策 3】ひとり暮らしやねたき老人のための家庭奉仕員の増員や施策の拡充、看護休暇の導入1専業主婦年金、遺族年金、厚生年金の男女平等1総合的施策を1

【啓蒙活動を 2】

完全な男女平等に向け定期的、恒常的な施策と啓蒙活動を推進1夫または父親が仕事重視から家庭重視の価値観を持ち家庭と仕事のバランスがとれた生活が出来るよう指導1

【夫婦別氏の法制度 2】

b 先生ご自身はこのことについてどのような活動をしてくださいますか

● 国会における質問、行政への申し入れ 13

● 実態調査、意識調査、懇談や意見交換 6

● 広く世論を喚起、啓蒙 2

- 女性議員を送り出す努力 1
- 立法府や行政の動きを知らせ国民の運動を広げる 1
- 職場における男女平等のたたかいを励まし、啓蒙する 1
- 一市民として地域で活動を継続 1

【具体的取組み】

育休法5労基法、均等法の改正3パート法2育児行政の充実1売防法、風営法1雇用、年金、介護について11タルに1家庭科共修2（森暢子、藤原ひろこ）

回答結果を見て

回答くださった方はすべて、男女平等教育の第一歩としての男女共修家庭科の重要性を理解されており、又積極的に取り組んでくださる回答を得て心強く感じました。又男女平等教育推進のための他の施策についても、その具体策を今後の課題としては是非御検討いただきたいと思いました。

お忙しいなかを回答いただき感謝するとともに、今後の更なる御協力をお願いいたします。

男子校アンケート追加分

持田 ナミ

会報'89冬号報告後回答のあった5校（公立2、私立3）の内容について報告します。

● 追加校の問3（c）について、（内私立

- 問3 知っている2(3)
- 問4 知っている1(2) あらまし(1) 無1
- 問5 アイエ1・アイウ(1) エあい(1) 無1(1)
- 問6 学校選択(2) 個人選択1 無1(1)
- 問a 賛成1 どちらともいえない1(3)
- 問b 学校選択(3) 個人選択1 無1
- 問c 生活技術(2) 生活一般(1) 検討中・無2

問eは無2(2)と未定(1)でした。

年度計画については、私立（六学制）が'89年度勉強会・基本方針決定、'90年度施設建築と教員採用、'91年度から中・高とも一年生から先取り実施と記入しており、もう一校（私立）'91年度調理室、準備室を作る予定、専任採用もあるだろうと記入しており、他の3校は未定でした。

9については、年度計画に記入した2校が基本的に賛成。社会における家庭の役割の変化を考えると妥当なこと、ただしむやみに、

男女平等論、女子差別撤廃運動と結びつけるのは考えもの、と言っている。

hではますますがんばってもらいたい。共

学初年度から共修にする予定としている。

※問3（e）の中で無とあるのは無記入です。

兵庫県でも

中学にアンケート

姫路 香川 敦子

会報の男子校に対するアンケートのまとめを見た。私たちは中学での共修をすすめる勉強会をしているので、私立六学制のデーターに目をとめた。これはすべて特殊なケースと

いう。いつも盲点になる中学校の「技・家」であるが、今度は、高校が男女必修になれば、そこに送り出す中学の「技・家」は責任が重い。食物・木工・家庭生活・電気の必修わくの内容を充実させ、その上の選択三領域以上でも、男子むき、女子むき意識を植えつけなければならない。

私たちは兵庫県の中学にアンケートを求めた。その反応は、積極的肯定と、とまどいは半半。具体的には、時間わりが組みにくい、家庭生活の内容がつかめない、力量不足を感じるといふものがある。高校が共修になった

という変革は、当然としながらも、骨ぬきになることの不安、中学高校の連携の必要性痛感など。

平成二年度は全年共学とする例もあるが、共学は二年まで、三年は女子のみで保育・住居というものも多い。新一年生に対する三年間の計画は、殆んどたっていない。

選択領域は学校がきめるが「男女同一領域を」に対して「男女が異った領域を履修することができるようになる」の方が多いのは気になるところである。選択領域を何にするか、その学習形態をどうするか。東京都の移行措置基準・資料によれば、平成二年からの移行措置の中で、「新指導要領の趣旨をいかす」、「男女の差を除く」とかかれている。「技術・家庭」という教科でありながら、男子用・女子用の教科書が別であった時代から、二領域の共修、そして今回の四領域の男女必修となっても、まだ、技術は男子、家庭は女子という亡霊がいかっているように思われてならない。

情報化時代といわれながら、必要な具体的な情報は現場に不足している。流される情報は文書の棒よみであり、当分現行のままでもかまわないという結論である。自主検討のシステムはつくるのがむずかしい。どこかに火を点けられないだろうかと思う。

男子校アンケート

マスコミでは……

石川 由紀

いわゆる「男子校」へ出したアンケート調査結果を各新聞社に送ったところ、かなりのスペースをとって載せてくださった。その結果として各方面から問い合わせをいただいた。個人、教員養成大学、教科書会社、テレビ局、文部省記者クラブ、情報関連会社など。各人が何を知らなくて、また何に使うつもりなのかは分からないが、私たちとは違う観点から役立つデータであることは間違いないようである。私たちもこの貴重な資料をもっと活用すべきではないかと改めて思うところである。

◇気になる見出し

ところで、このように各方面へ知らせてくださった各紙であるが、その見出しにはちょっと気になるものがある。

「家庭一般」は不人気 必修になる高校男子家庭科の選択 多い「生活技術」「生活一般」、4年度の必修に向けて 家庭科に困惑する男子高 「導入しやすさ」軸に科目選択相変わらず、特性にこだわり「平等の視点」理解まだ不十分、家庭科の男女必修

困惑・苦慮の男子校、男子の家庭科履修に賛否両論 衣食住の基本学が必要 まだ根強い役割分担意識。

このような見出しからどのように受け止められるのか。私がこの問題が新聞にできることによって期待することの第一は、男生徒も家庭科を履修することが決まっていることを認識して欲しいということ。次にその対応が全く遅れていることに気がついて欲しいということ。そして、なぜ男生徒も家庭科を学ぶことに決まったかを知って欲しいということ等である。そこで私がこの見出しから危惧を感じるのは、やっぱりまだその時期でないと考えている学校が多いのだとか、どの高校もまだ対応を考えていないのかとか、男生徒用の家庭科を考えないといけないのではないか、などと思う人が出ないだろうかというところである。管理者の中には、何もうちだけが、まず他を見てから、などと新しいことに取り組むことに消極的な人が結構多いものである。特にいまどきの学校は、とっている私だけの心配であって欲しい。

◇Weの会では

このアンケートを基に、新しい家庭科We誌の読者が中心となっているWeの会が話し合いの会を持った。テーマは「男子も必修の家庭科でこんなものいる？ いない？」。

の中で出て来たことの一つに教師の感性の問題があった。男子高の男性教師は「家庭科というと被服と食物のイメージが強い。実施されようとしている家庭科の中味を知らないから、知らないに繋がる。だからやらなければならないのかもしれないが言われる迄待ってるといふ姿勢になっている」という。また、ある教師は「学校というところは生徒からの要求には弱い。しかし今、家庭科への要求が非常に弱い。それもすまない理由である」という。

それではどんな家庭科を男子高でやって欲しいかというと、「男子高では教育の中で異性とめぐり逢わない。男の人たちが命を大切にすることを教育を」「国際化の中で外国で何もできないでノイローゼになった人もいる。血となり知となるもの。知識だけではないもの」「男子校にふさわしいということで父親教育をし、それが亭主関白を作ったのでは困る」「生きる上で必要なこと・人と人とのコミュニケーション、自己実現をいかに果すか」「先生が揃えたもので作るのではなく、どれとどれで何を作るかが考えられるような教育」などが出て来た。

何があるかないか、共修をすすめる会の皆さんも意見を寄せて欲しい。

NHK

おはようジャーナル

では

ゲストとして出演して

半田たつ子

「会」の男子校アンケートがきっかけで、久しぶりで家庭科がNHKテレビに大きくとり上げられた。2月27日おはようジャーナル「ぼくたちも家庭科?」男子必修化の中で」である。

ゲストとして招かれた私は、開口一番こう言った。「16年前の2月、こんにちはは奥さん、で家庭科を取り上げた時、私も参加していたが、ある女性評論家が「男子が家庭科をやるなんて、風景としてイヤだ」と発言したことを、印象深く覚えている。16年の間に、男子が家庭科を学ぶ風景があたり前になったことを、ほんとうにうれしいと思う」と。

加藤美和子記者が丹念に取材し、男女共修の川崎市立川崎高校、京都府立鴨沂高校の授業風景、先生の言葉、生徒の発言を伝える。

生徒たちはごく自然に、男子も家庭科をした

ほうがいと語り、先生たちは、人間として生きていく力を、男子にも女子にもつけたい、男子と一緒にいるほうが、私の教えた内容に説得力を増す、と語った。

逆コースをたどる京都府教委の「男子と女子と一緒に履修すると、その分基礎教科科目にしわ寄せがいく」のおかしな意見をブラウン管にのせたことにも意義がある。

男子校は駒場東邦、都立秋川、豊島実業が紹介された。校長たちの受験教育しか眼中にない貧しさや、いまだに、えさを母親に運び、外敵と戦い、争い、稼ぐのが男の役割と思い込んでいる姿も露わになった。

現実の家庭のほうに先に進んでいると、大越さん、牧野・中嶋さん両カップルの生活と意見が紹介された。

私の発言は三回、合計八分ほどだが、文部省は施設設備、教員配置のための予算措置をとらずに生活技術・生活一般を設けて男子校に抜け道を教えたこと。それに飛びついて「男子向」家庭科を教えるのでは、男女の役割分担の再生産になること。私たちが願う家庭科を男女で学ぶ姿が定着するなら、日本の家庭はもちろん、学校も変わるであろうことを強調した。

若者をゆがめる男性校長たち

中嶋 里美

二月二七日放映の「ぼくたちも家庭科?」は古い時代と新しい時代を浮彫りにした番組だった。生活を大切にするよりも立身出世を、男女が横に並ぶよりも男こそが一家を守るのだという古い時代の価値観にしばられた男性校長や指導主事たち。片や男女一緒に家庭科をやるのは楽しい、あたりまえとする高校生若者、女性家庭科教師たち。

京都の西宇治高校の男子が何故男が家庭科をやらなくなったのかかわらないと言っていたが、進学率を上げるためには生徒に廃止の理由すら説明していない校長。この校長は取材も拒否した。検討をはじめた男子校豊島実業高校も出てきたが、生徒も教師も男子だけというのは全く不自然であり、家庭科に対する認識が十分でない。

この番組を使いながら、現場に対して家庭科共修にむけて取組みを始めるよう働きかけていきたい。

★各地の状況をお知らせ下さい。はがきでも、世話人への電話でも結構です。

国会・都議会から

石川 由紀

参議院決算委員会から

11月15日、参議院決算委員会において、刈田貞子議員が家庭科の男女共修問題について質問をされた。その一部を議事録から拾ってみる。(刈は刈田議員、菱は菱村初等中等局長、倉は倉地教育助成局長を表わす。)

刈・一九八五年の女子差別撤廃条約の批准に際しては、近き将来の指導要領改訂時に必ずその共修を進める教育課程をつくることを担保に批准を進めたという経過があり、これは世界に対する公約であるが、新指導要領の中にはその文言はどこにもない。附則にはその抜け道すら書いてある。その精神はどこで読んだらいいのか。

菱・目標とか内容、履修の仕方などを見れば完全に男女同一、平等を前提にしたカリキ

ュラムであることがわかる。

刈・三科目から選択必修とした理由は。

菱・94年も高校に入っている生徒の多様な能力や適性に対応するためであり、いずれを履修しても家庭生活に必要な能力とか実践的態度を育てる観点からつくられている。

刈・もし生活一般を男子が、家庭一般を女子が偏って必修した場合、従来の形を踏襲するというような弊害は出ないか。

菱・どの科目が女子で、どの科目が男子でということとは考えていない。

刈・生活一般では教師、施設設備等整わない場合は当分の間二単位でよしとされているが、これが必修の抜け道にならないか。また依然として男女役割分業の固定化観念みtainなもの教育環境の底辺にある。受験重視教育という関係からも二単位でいいということになっていかないか。計画は。

菱・産業教育振興関係の補助金の充実に、その裏となる交付税も充実していきたい。

刈・教師の手だてについては定数法とどうかかわってくるのか。特別加配か、仮免許等の措置でやるのか。

倉・全体時数が変わっていないから基本的には現在の定数で、全体の教科の調整によって処理される。採用については仮免を考える

ような事態ではないと考える。

刈・女子差別撤廃条約の十条(b)・(c)・前文をクリアしていくに値しているか。

菱・この問題はクリアしていると考える。

このように一応クリアしていると文部省は言っているのであるから、新指導要領による教育の内実が条約に合致するよう現場段階での努力を望むところである。

家庭科の男女共修問題といえば「文教委員会」と思いがちであるが、このように決算委員会でも取り上げられることもあるのである。外務、環境、法務、社会労働、予算等、あらゆる委員会の場で政府の施策の遅れをチェックしていただくことが望むところである。そのためには各会員の働きかけが必要であるう。

衆議院文教委員会から

12月6日、衆議院文教委員会での江田五月議員の質疑応答の中で、文部省発言として気になった四点をご報告します。

江田議員が男子にも家庭科を教えるという時代の流れ、意義について文相はどう思うか

との問いに、石橋文相は、「時代の変革を感じる。やはり男社会、女社会があつて、これが共同して家庭の中、社会の中でますますいいものを作り上げていく。お掃除や洗濯は女だけにやらせて男は知らないよということであつてはならないな、と実感できるようになつた」と応えているが、男社会、女社会をなくす気はないらしい。

中学の技術・家庭科で各領域二単位の必修が決まっているが、あとの二ないし三単位は選択となっているが、両領域が偏らないフイフティー・フイフティーに当然なるべきだと思ふが、との問いに菱村初等局長は、各学校が各々に組むことで、男子向き女子向きというのではなく、男女平等の立場で選択できるように構成していただきたいと考える、と答えているが、思っただけで狙い通り達成できると本気で思っているのか。施策はないのか。

以前の答弁の中で当時の局長が中学も前倒しで実施すると云っていたがその後は、との問いに、菱村局長は特例を定めて移行措置を講じ、前回御指摘につながせた、と回答、現場の先生方はもうご存じなのだろうか。

各学校の計画の実態調査は、との質問に、菱村局長は、今家庭科を置いてない学校というのはわかっている。現在のところ各都道府

県の具体的な計画は定まっていけない。今後十分意を尽していきたい、そうだが、江田議員は当会の行った男子校へのアンケート調査結果を引用し、万遺漏なきようにと結んでいる。ここで私が気になるのは、男女平等ということ政府側がわかっているのではないのではなく、男向き、女向き隠しをしようとしていることである。学校の実情や生徒の自由選択の結果と言わせない策があるのではないだろうか。

都議会女性議員の要望書

東京都議会社会党・都民会議の女性議員12人からなる都議会女性議員会議は「平成二年度東京都予算編成の男女平等政策推進に対する要望」を都に提出した。これは社会党・都民会議の出した都の予算編成に対する要望書の中から、男女平等の推進にかかわる部分を抽出、加筆したものである。基本要項11項目、要求項目6、具体的な項目48があげられているが、その中には「男女平等観にたった人間形成の推進をはかること」という要求事項があり、13の具体的項目を示している内、「男女共修の技術家庭科実施にむけて担当教員の増加、施設設備の整備充実をはかり、全ての

中・高校でスムーズに移行できるようにすること」は当会の要望そのものである。その他にも、「教科書の内容を男女平等化へ向けるため、調査研究、啓蒙活動を行うこと」「学校教育における『男女平等教育ガイドライン』を作成・配布し、各学校での男女平等教育実施状況を調査・指導すること」等を出している。こうした要望書を出すことによって、男女平等の問題が政治課題として予算にのぼり、政策になっていくという。こういう形で女性議員が要望書を出したのは初めてのことで、それも女性議員が増えたことによるところが大きい。衆議院でも参議院に続き女性議員が増員となった。地方議会でもはつきりと思ふが、あらゆる段階の議会でのこのような形の活動が活発になると、男女平等もすすみが早くなることだろう。

私たちには働きかけという役割があることを覚えておきたい。そして、その働きかけも時期がある。議員が取り上げ易い時期や方法を知るためには日頃からコンタクトを取ることが必要であろう。その時、単にお願いするだけでなく、運動を継続して行く上で仲間になっていただくことが大事ではないだろうか。要求を知り、政策に持って行くのが議員の役目の一つでもあるのだから。

入学定員差別をなくそう

浜松 武田 恭子

「公立高校の入学選抜における男女差別を考える会」は、二年前静岡県立山崎高等学校理科入試において象徴的にみられたような、入学選抜の際の女子への差別的取り扱いがあることを憂慮してきた市民の呼びかけで発足したものです。

私たちの住む静岡県西部、浜松を中心とした西遠学区には、浜松北、西という進学校があります。それらの学校の女子の比率は21%程度にすぎません。そこに進学を希望する女子の合格ラインは男子より高く設定され、入りにくくなっていることは歴然とした事実です。これが問題化してこなかったのは、浜松北、西に匹敵する成績の女生徒をも収容する伝統ある公立女子高校浜松市立が存在し、「女子は何も無理して、北や西にいかなくても嫁にいくなら市立だ」「男はいい学校で、いいところへ就職しなけりゃ」というのが、社会通念としてあったからです。そして、北高や西高の学校側も「女子がふえると活力がなくなる」「女子は入ってから伸びない」と女生徒を追いやってきたのです。公立高校全体で女子は2900人も男子より少なく、女子の私学依存率は約40%で男子の二倍にのぼります。

公立高校の校長は「学区全体としてバランスがとれている」「各学校にはそれぞれ教育目標があり、特色ある教育活動をしている」と、男女差別であることを認めていませんが、私たちは「男女共学はそれぞれの学校で実現されるべきものであり、男女比のアンバランスを正し、思春期の子供たちが自然な形で互いの性を理解し、尊重するという機会を保障されなければならない」「男女数に差をつけて成立する教育目標とは何か、それは、憲法、教育基本法、女子差別撤廃条約に照らして正しいものか」という点で反論しています。

今度の学習指導要領の改訂では、各教科の科目数がふえ、選択の幅が広がっています。これは「個性に応じて選べる」かのような宣伝をされていますが、実際は教員の定数が全くふえないために、一つの学校がどれをどう組み合わせるかで履修させるのかという選択校がふえた分、学校間格差が広がります。特色ある学校づくりが進められることになり、各学校の打ち出す特色が、様々な個性を持った子供を包容するのではなく、差別選別を強める可能性が大きいことを危惧しています。「特色づくり」の名のもとで、工業高校のように男女比のアンバランスが強まり、男女別学傾向が進めば、家庭科の男女共修も理念だおれに終わってしまいます。

全国的にみても、高校の男女共学の不徹底、

空洞化は無視できない状況です。皆さんと一緒に運動していけたらと思います。

署名運動に協力して下さる方は、〒430浜松市元魚町150-5浜松婦人懇話会内公立高校の入学選抜における男女差別を考える会Vにご連絡下さい。リーフもあります。

都立高男女定員差別 やや改善

中嶋 里美

日比谷、戸山等の旧ナンバースクール十二校の男女募集定員に差別があるとして都議会や女性団体から抗議を受けていた都教育庁は一九九〇年度の女子率を少しアップした。こうした学校の女子の割合は今迄平均三六・四%であったがそれを四〇%以上に拡大した。

三井マリ子、佐久間むつみ議員が議会で六回も取上げたり、二年前に「東京都の男女平等を実現する会」が東京弁護士会に救済を申立て、東弁が「都立高校全日制普通科の男女格差募集に関する勧告書」を出して広く世論に訴えた。さらに行動する女たちの会が集会をひらいたり、石川忠雄都教育委員長と会見し、男女同数の生徒が同じ教室で学ぶことの意義等を訴えた。また都内のいくつかの団体と教育庁とのディスカッションも開き、男女平等定員を強く求めた。都以外の自治体でも男女平等定員を求める運動を展開して欲しい。

「男女共に学ぶ家庭科を 早期に実施したい」

と文部省

菅谷 薫

89年12月8日の東京都家庭科教育研究会で、河野教科調査官より先般告示された移行措置に関する説明がありました。

それによると――

① 総則の特例(5)ですべての男子に家庭科を履修させる場合は「家庭一般」とし、その場合すべての男子及び女子の「体育」は新指導要領に基づき、全日制普通科は男女共の単位を下らないこととしたのは、早い段階から家庭科の男女必修をやりたからである。

とりわけ、施設・設備を94年までに整えるためには、91年位より順次着手しなければ間に合わない。そこで整った学校から施設・設備を使って欲しいので、特例をもうけた。

② 具体的には、男子2単位 女子4単位の「家庭一般」はあり得ない。なぜなら、「家庭一般」は4単位であり、体育の単位を男女共9単位を下らないとしていることでも言えるが、男女とも同一の取り扱いをすることが

新指導要領の趣旨であるから。

③ 特例(4)で、生徒の実態などを考慮し、必修科目の単位数の一部を減じることができるとしているが、これはすべての必修科目を対象としていることに注目して欲しい。従って、簡単に「家庭一般」は2単位に出来ると決定されることのないよう留意して欲しい。つまり必修の単位が現行より2単位分増加することとを、どう取り扱うかは、必修科目すべてを検討の対象としていくよう強く働きかけるように。

④ 現行指導要領に基づいて、「家庭一般」男子2単位、女子4単位、「体育」男子11単位、女子7単位を既に行っているところは、引き続きその形でもよい。

ということでした。しかし冬号で半田世話人の指摘した危惧は、何ら解消されるものにはありません。まだまだ国や地方自治体への強力な要請活動が必要な情勢です。

次に新指導要領に関しても言及がありました。

① 「生活一般」に関して、附則2にある「当分の間」は、「施設・設備が整うまで」、同「特別の事情」は、「男子校や工業高校などの家庭科をやっていない学校のための記述で

あり、現在家庭科の授業をやっているところは当てはまらない」

② 「男子は『技術一般』、女子は『家庭一般』は可能か？」という質問(国立大附属高校より出された)に答えて、「男子はこれ、女子はこれというのはダメであるが、三科目の講座を用意して生徒が選ぶのはよい。男女共学とはどこにも書いていないので、学校や生徒の実情の中であるかも知れない。指導要領はその点に触れていない」

国会議員の質問に、文部省は今次の家庭科の変化は、女子差別撤廃条約の第十条(b)項に基づく国内制度の見直しの結果と答弁しているが、これではその趣旨を理解していない、国会答弁は実質を伴わないと言われてもしかたがないといえよう。

最後に、男女共必修4単位の家庭科を実施するに当り、担当官として条件整備の優先順位を①施設・設備②人員③班別(一講座当りの生徒数の縮小)と考えている、①に関して11月に各県を通じて実情調査をした、②③に関して90に教員定数法が変るが、まず職業科から検討、普通科はずつと先のこととなるうことも話されました。

中学・高校

移行措置に対して

私たちは…

和田 典子

89冬号で半田さんが書いている通り、先に告示された高校の移行措置は、3月27日告示の中学校の場合と同様に、90年4月より新学習指導要領の趣旨にそってすすめることが認められています。『会』の立場からいえばいくつかの問題をはらんでいます。

たとえば高校の場合、現行の教育課程で必修をはじめることができても、家庭一般4単位の確保がきわめて困難なことです。そのために、全面的くみかえて実施する94年まで2単位だけでも必修をはじめるか、女子のみの現状維持でも4単位を守った方がよいのか、迷っている現場が少なくありません。

その上移行措置の総則には「特に必要ある場合には必修科目の単位数を減じることができ」とある上「家庭一般を男女必修にする場合には、体育9単位は確保せよ」との特例を示しているのに「家一も4単位は守れ」と

は一言もいっていません。従って94年以降でも家庭一般の4単位が保障されるわけではないし、生活技術や生活一般を選択すれば、後半の2単位は家庭科的内容にはならない公算の方が大きいことは、学習指導要領をみればあきらかです。

それを見越してか、埼玉県などでは選択必修科目は「二科目を設けるように」といった行政指導が行われたりしています。

もっとも文部省は「男女別の取扱い」は認めないと公約していますから、選択に際して男女を振りわけるとは許されません。ただし自由に選択した結果としての男女別履修は認めるというのですから、現場の対応次第で真の共学にならないという深刻な不安は残ります。

以上のような状況を考え合わせると、移行期の行政施策が、なりゆきや現場任せでは差別撤廃条約の精神にそった共修家庭科を実現させることはできません。

また、中学校「技術・家庭」についても、同様にいくつかの問題があります。たとえば3年の時間数が2・3と選択幅がひろがり、A・I・E（技術系）H・I・K（家庭系）の領域選択も、必修の4領域を除いたのこり7領域のなかから、両系列こみで3領域を選べ、とい

うのですから、どちらかに偏したり、男女がわかれたりする心配が少なくありません。

おまけに必修領域の「家庭生活」「食物」と「木材加工」「電気」の履修学年と時間数は一・二年、35時間と指定されており、選択領域の時間数20との間には大差があります。こうした制約がなく、自由にカリキュラムの編成が許されるなら、A・I・Kの全領域にわたって全面的な男女共学をすすめることも容易になるのですが…。

もっとも移行期に入る90年度から完全実施の93年度までは、現行の領域のうち「食物」は必修扱いですが、その他については弾力的な取扱いが認められるようですから、93年度以降も現場の自由裁量をひきつづいて認めてほしいと現場からは強い声があがっています。そのほか中学、高校をとわず、共修実現のためには、教員の定員増や学級定員の適正化施設や備や教具・教材の充実が欠かせません。こうした教育条件の整備は、全面的に行政の責任ですからくり返し要求する必要があります。

次頁の要望はこうした状況をふまえて、文部省や各自治体が行行政指導や対策を立ててもらいたいとの意向で起草しました。「会」では新しい文相がきまるのを待って、世話人有

志が、直接大臣を訪ねて文書を提出することにしていきます。

△現場でのとりくみについて▽

現場の先生方をお願いしたいことは――

一つ、中学・高校とも、全面实施にむけて、教育課程の編成にすすんで参加し他の先生方と協同して作業をすすめるが、家庭科男女必修の意義をくり返し訴えて下さい。

二つ、できることからできる方法で男女共修家庭科を始め、その授業を同僚の先生や父母の方にくり返しみてもらって下さい。

三つ、高校の場合、家一4単位がムリなら2単位でもよいから必修を始めて下さい。残りの2単位は男女選択にしておき、94年からの教育課程では4単位になるような準備を並行してやって下さい。

四つ、教育条件整備の運動を幅ひろい人々と手をつないで、すぐに始めて下さい。

連絡会の活動の記録「連帯と行動」については前にお知らせしましたが、もうお求め下さいましたか？ お知り合いの方、図書室などにもおすすめて下さい。

お申し込み、お問い合わせは婦選会館（〇三・三七〇・〇二三八）へどうぞ。

中学校「技術・家庭」

高等学校「家庭」の

移行措置についての要望

昨年告示された中学校および高等学校の移行期間中の教育課程のうち「技術・家庭」および高校「家庭」について検討を加えた結果、移行にあたっては、左記の諸項目については改善又は補足が必要と判断しますので、それらについての指導を急ぐよう要望いたします。

記

一、今次改訂の趣旨は「男女平等をすすめる教育が前提である」ことを、移行措置のすべての関係文書に明記すること。

一、右の観点から、性別履修にならぬよう男女が同一内容を同一教室で履修するよう指示すること。

一、男女共学・必修は、可能な限り早く実施することを認め、妨げぬこと。

一、中学校「技術・家庭」のA・I・E、H・I・Kの二系列の配置・配当時数は、毎学年均等になるよう編成し、どちらにも偏しないような指導を行うこと。

一、「技術・家庭」では三年間で最低七

時間、高校「家庭」では四単位必修を確保するよう指示すること。

一、中学校「技術・家庭」諸領域の「必修と選択」「配当時数」「履修学年」などの指定はすべて撤廃し、標準時数を強制せず、学校の自由採量に任せること。

一、中学校「技術・家庭」高校「家庭」の全面的な男女共修が成果をあげるために施設設備、教材教具の早急な充実、安全確保のための半数学級（班別学習）の制度化、産業教育振興法基準の見直しを急ぐことは不可欠である。そのための措置を急ぐよう自治体を指導すること。

一、男女必修の趣旨を徹底するため、すべての中学校に技術科、家庭科、高校に家庭科の専任教員を必ず配置するよう指導すること。

一、工業高校、男子高校など従来家庭科教育を行っていない高校には、教科開設の要員として、教師定員に特別枠をみとめ、実施前年度より専任教員を加配するよう指導すること。

一、私立の男子校においても家庭科を設置し、実施するよう指導すること。

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための

連絡会報告

和田 典子

十二月四日の全体会

★紀平悌子、清水澄子参議院議員の当選祝いと励ましのつどい

長らく連絡会の常任委員として活動されたお二人の当選をお祝いし、国会での活躍を期待してささやかな席をもうけました。

席上両氏からは所属委員会（紀平＝法務、清水＝法務、環境特別）で、婦人問題や人権にかかわる問題を取りあげたい等の抱負や新人議員としての感想などが述べられました。

★世界婦人会議について

2月26日から3月9日まで開かれる国連の拡大婦人の地位委員会で、検討が予想されている九〇年代世界婦人会議の日本開催を提案するよう、政府に申し入れることになりました。

★衆議院選挙に女性の進出をはかるための各政党への要望案について

政策決定参加の小委員会よりの提案をうけて原案に修正を加えた上決定、実行しました。

★生涯学習構想への対応について

教育小委員会（11月13日）の報告をうけて政府・文部省に対する要望書およびホラービデオなどの状況と対応について話し合われましたが、大きな問題なので、拡大委員会をひらいてもう一度検討することになりました。

★ユニフェム事務局長の来日について

平和・国際協力小委員会ではユニフェムに関するワーキンググループを作り検討中ですが、三月（二〇日）には事務局長のシャロン女士が来日予定なので懇談会を行いたい由。

★妊娠中絶の可能期限短縮について

厚生省の公衆衛生審議会優生保護部会では現行二四週を二週に短縮するとの結論を出す状況なので、一方的な通達できめないようにとの要望書を急いで出すことを決めました。（尚、この件は89・12・18に答申が出され、'91年1月1日より実施されることが決定）

★加盟団体、五〇になる

総評が新連合に統合されたので、婦人局と主婦の会の加盟が解消され、連絡会は五〇団体になりました。（代表の山野和子さんから

「会」あての退任挨拶状が届いています）

教育・マスメディア小委員会では

前の全体会の意向をうけて12月14日にひらいた小委員会で左の件について協議しました。

(1) 生涯学習政策に対する要望について
政府の構想はきけたが、具体策はまだつかみ切れないので、当面の行動としては、

① わたしたちの求める生涯学習の原則をしめす。② ①の観点から政府の構想にひそむ問題点や疑問を提起する。ことにしました。

(2) レンタルビデオ問題への対応
連絡会としては「女性の人権侵害に対する抗議の観点からとりくみ」①関係機関に申し入れをしますが、②抜本的な対応として、マスメディアを総的にチェックするような常設の機関を設ける必要が提起されました。

(3) 国際識字年へのとりくみ

ユネスコの「世界寺小屋運動」への基金協力要請への具体的な対応は、国際協力小委員会の検討をまつことになり、(1)(2)と合わせて次の全体会に提案することになりました。

世話人会報告

△12月23日▽

89年最後の世話人会を、冬号発送作業の手を動かしながら行いました。

◎男子校アンケートの結果を運動にどのように生かしたらよいかを話し合う。回答を寄せられた学校に会報を送り結果を報告すると共に今後の運動への協力を要請、男子校のリスト作成、又アンケートに寄せられた要望やとまどいを整理して、一問一答形式のパンフを作成することに。

◎移行措置の告示をうけての要望書を作成し、又国会議員を通して文書質問等も続ける。

◎女性の国会議員へのアンケート、44名中17の回答。まだの議員には再度働きかける。

◎刈田貞子、江田五月両氏、国会で、男女同一のキャリアラム、条件整備に焦点をあてた質問をされた。

◎浜松で「公立高校の入学選抜における男女差別を考える会」発足、会への支援協力要請。会としては、会報での協力よびかけ、「すすめる会・浜松グループ」として加盟等の協力することに。

★場所を「じょあん」に移して、美味な幾皿もの料理と柚子焼酎に舌鼓を打ちながら、連絡会教育マスメディア小委員会で取り組んでいる生涯学習構想の検討やアダルトビデオの氾濫について、また男子校アンケートへのマスコミ取材・放映・その後の反響などについて話がはずみました。発送作業からの参加の姫路の香川さん、四年間事務局をめぐりやってくるだった石川恵子さんを混じえてのにぎやかな望年会でした。（芦谷 薫）

△1月27日▽

◆朝日新聞「今こそ家庭科」連載当時のデスク菅原伸郎氏が論説委員に。家庭科のその後を知りたいと半田を訪ねられ、夕刊「窓」欄に「ヒゲの家庭科」を書かれた。高校の指導書が出たら社説に書くとのこと。

◆NHKおはようジャーナルで2月27日、男子校のアンケートを中心に30分取り上げる。

◆移行措置についての文部大臣あて要望書、和田さんの原案を検討、新文相決定と同時に出すことにして、次回に再度検討する。

◆女性議員からのアンケート、回答率低い。教員出身の森嶋子氏がきちんと答えて下さっているの、三月に入ったら森さんに会い、今後よろしく願う。衆議院議員新人にも同様のアンケートを行う。

◆四月七日総会のための準備、役割分担。

◆母親大会（開催地千葉）の準備進捗状況を聞き、母親大会の名称変更を提案しようということになった。（半田たつ子）

△2月17日▽

◎移行措置に対する要望書を文部省へ持参する。三月十七日、半田、和田、榎本、中嶋参院女性議員へのアンケート結果の掲載されている春号とお礼状、入会勧誘のちらし、リーフを送る。お礼状には家庭科の当面の課題を入れる。担当芦谷。

◎新衆議院文教委員、女性議員、参院男性文教委員にもアンケートを送る。担当芦谷。

◎二月二七日NHKおはようジャーナルで家庭科の男女共修を取扱うが、今後現場むけのビデオなどが必要である。文部省や各教育委員会に作らせる事を方針にも入れた。

◎四月七日の総会にむけて総括、方針、決算が提案された。男子校へこちらから出向いてインタビューや情報交換をしたい。年四回の会報には最低一校ずつの現状を取材したい。

◎高校の指導書は三月になる予定。

◎世話人の樋口さんが婦人放送者懇談会から受賞され、羽賀さんが昨年末出産されました。おめでとうございます。（中嶋里美）

おしらせとおねがい

世話人会

★会費をお納め下さい

90年度の会費は正式には四月七日の総会でまかりますが、世話人会では会費改訂の提案はいたしませんので、年額三五〇〇円として納入して下さいますようお願いいたします。

★世話人になって下さいませんか

新鮮な感覚で共修運動を推進して下さい方にはありませんか。特に、首都圏以外で各自治体の教育委員会や議会に働きかけるなど、地域の運動の中心になって下さる方。また、首都圏の方は、月一回の世話人会に出席し、いろいろな仕事を分担していただきたいと思ひます。事務局または世話人にご連絡下さい。

★事務局の担当者が交代します

石川恵子さん（石川由紀世話人のお嬢さん）から半田めぐみさん（半田たつ子世話人のお嬢さん）に変わりますのでよろしく。

なお、事務局の場所は従来通り婦選会館ですが、事務局で作業を行うのは原則として週に一日だけです。電話連絡は左記にお願いいたします。

☎〇三・三二六・一三八〇 We 書房（半田）

四年前のこと、世話人会から帰ってきた母から、共修の会の事務局をやってみないかと言われ、一、二日後私は深く考えずに引き受けた。この会がどんな方達の集まりなのか、普段母からよく聞いていたので、概ね理解していたつもりだったのだろう。

事務局の主な仕事（受信物の処理、会報発送の為に封筒作成等）の他、私が事務局になって数ヶ月後に「家庭科が六年後男女必修になる」ということが表明され、当会では世話人を中心に全国の会員が活々と忙しそに活動に入ったため、それに伴う事務作業も多くなった。相次ぐ新しいパンフレット・リーフレットの発行に伴い、希望者への発送作業や、文部省、臨教審、教課審の方々への数回にわたる意見書・要望書の発送、最近では、全国の男子高等学校長

皆様、はじめまして。私が、石川恵子さんから、バトンタッチをして、4月から事務を担当させていただくことになりました。現在、私は、仕事をしながら、カウンセリングの勉強をしております。ですから、時間の都合上、皆様とお逢いする機会も、あまりないと思います。ですが、母がこの会に参加しておりますので、母を通して、そ

や衆・参両院全女性議員へのアンケートというスケールの大きい仕事が続いた。おかげで、普段メディアでしか目にしないような偉い先生方にあてて発送するなど、多分歴代事務局でも派手な役回りではなかったかと思う。これも世話人の方々の丁寧な指示やご指導があったとのこと、感謝している。ただ一つ感じたのは、会員の方々に限らず、「家庭科の男女共修」や「男女平等」に積極的に賛同する若い人が男女共にまだ少ないということだ。私自身も含め、今後を担う世代の人に、この温かく情熱的な先輩方の意志を継ぐ人がもっと増えれば、と思う。

最後に、大学時代に得難い経験をさせて頂き、どうもありがとうございました。

石川 恵子

して事務の仕事を通して、皆様と活動してゆきたいと思っております。できる限り、仕事を通して、皆様との心のかよいあいができるように、心を配ってゆこうと思っております。非力ながら、精一杯務めさせていただきます。よろしくお願いいたしますので、どうぞ、よろしく願ひいたします。

半田めぐみ